

書評

大江 透 著

不整脈

ベッドサイド診断から非薬物治療まで

国立循環器病センター・心臓血管内科

栗 田 隆 志

評者は20数年前、レジデントとして赴任した国立循環器病センターにて本書の著者、大江透先生に出会った。昼夜を問わず嬉々として患者のもとに赴き、精力的に診察する姿勢に惹かれ、評者は迷わず大江門下生のひとりになった。先生は日頃より診療で得られた心電図や臨床所見を臨場感溢れるストーリーに仕上げ、ファイルに留めておられた。これが知る人ぞ知る「大江ノート」である。難解で興味深い心電図があると先生は必ず「大江ノート」を持って現れ、過去の症例と比較しながら病態の本質へと迫るのである。私たちは目の前で繰り広げられる大江ワールドの虜になった。

新著「不整脈」は先生の独創的

なアイデア・発見のルーツとも言うべき「大江ノート」の集大成であり、宝物のように珍重されていた心電図や心内電位図が惜しげもなく展開されているものである。20年前、評者が深夜までお供しながら記録した心電図も掲載されており、懐かしい気持ちで胸が一杯になる。

先生は美しく、そして示唆に富む心電図を記録することにきわめてどん欲であった。例えば、「図8-12 房室回帰性頻拍の食道誘導心電図記録」、「図17-1 心房頻回刺激(経食道ペーシング)による発作性上室性頻拍の停止」、「図17-3 Wide QRS 頻拍の鑑別診断」、「図40-16 Vaughan-Williams 分類のIA群薬の追加で心室細動に

なった症例」などは、もう二度と記録されないであろう貴重な心電図である。さらに本書の驚くべきところは、あらゆる臨床不整脈を網羅する内容のすべてが自験例をもとに述べられている点である。膨大な「大江ノート」の中から、それぞれの内容に最も適した心電図を選びすぐった努力にはただただ頭が下がるばかりである。

最後に、特記すべきは、日本語で書かれた論文が数多く引用されていることである。これも骨の折れる大変な作業であったに違いない。わが国において、わが国の臨床研究者によってなされた仕事を高く評価し、暖かく育もうとする先生の深い愛情が感じられる一冊でもある。

評者は今、この新著「不整脈」を心に抱き、大江先生と同じ時を過ごせたこと、そして不世出の名著に出会えたことの幸せに深く浸っている。

〔B5 頁536 2007年 定価8,925円(本体8,500円+税5%) 医学書院刊〕